手記

光宗秀禅師の津葬

会員　河野典一

養賢寺住職立花光宗老師は、本山の資格上昇儀式の準備打合せのため、本山の招致により京都へ上り、用件を終り帰途についたが、山陽線車中にて突如発病、宇部駅附近に臨時下車、入院直後急に示寂せられた。去る四月二十四日の事である。

急報は養賢寺留守居の人々、檀家の人々、市内有識の人々、徐伯市南部内同宗派住職の人々を驚かせた。

老師は東福東師福東師の御出身。昭和三十二年養賢寺着任以来十九年間、寺宝什器の整理、建造物の修築、修業僧の育成、個人参禅者並に高校生参禅者の指導に努力せられ、専門道場住職として名声高く、将来管長適任者なりと同宗派寺院住職間にも噂高く、何人も老師の管長就任をどれだけ期待したか、衆目の一致した希望であつたのに、一朝にして示寂されたことは、誠に痛惜に堪えざるところである。

私は遺物御揮毫のお礼に参上したのを最初に、戸倉織部薬禅の経王一石一字塔の銘文中の、仏教語の教えを乞うこと三回、先年史談会が明石秋窓展開催に際し、軸物と科備と返戻の時、西中辺老人クラブ員四十人同道説教拝聴の時、又史談会が大分アルコウ会員七、八十人を養賢寺に案内した際本堂で御講話拝聴等、都合七、八回年願の機会を得、或は前の花園で人夫と共に草取などなされている時何度か御挨拶申し上げている。

御説教の如きも、某宗派の如く自宗派の宣伝ばかりに終始するが如き嫌味もなく、円満温厚の人格振り、そして部厚い仏教辞典を机上に置きながらも、これを繙くことなく解釈を即座になさる博学ぶり、驚嘆の外なく頭が下がる思いであつた。

未だ六十五才、これからを御期待申し上げていたのに盗賊としての示寂、津葬は予期せぬ大悲痛事である。式は五月十日午前十一時より、養賢寺本堂で次の通り執行された。謹んで光宗秀禅師の御冥福をお祈りするとゝである。

光宗秀禅師　津送　次第

一　衆入堂　（僧侶参列者道来を含む住職参列者四十六人　遺族親族十人、檀信徒を含む会葬者凡約三百人）

一　導師入堂　（緋の衣の導師三人三台の曲彔に着席、中央が本日の筆頭導師、走仁寺派管長武田益州禅師、光師が永年修業した走仁寺の当時の師家）

一　開式の辞

一　弔　詞　本山妙心寺弔詞　鶴州長勝寺香泉寿山師代読
徐伯市南部仏教会堅田真立寺　田良憲明師

一　弔　電　（百二十六通披露）

一　四仏誓願

一　山頭念誦

一　奠湯奠茶仏事

一　乗炬仏事

一　導師香語　筆頭導師、次の戒名なる香語を朗読す。
歴住妙心鼎山第二十三世　光宗秀禅師大和尚
（歴住とは京都にての住職を含めたもの）

一　唄　香　（鳴物・読経等は行われた）

一　檀家総代会長出納菊二郎氏挨拶

一　開式の辞
（資料提供は住職代行竹野浦潮月寺住職小林英洲師）